

障害児の音楽療法

——太田川学園土曜教室における音楽活動——

森 川 晴 美

Music Therapy for the Handicapped Children

——Music activities at the Saturday school of the welfare facilities
“OTAGAWA GAKUEN”——

Harumi MORIKAWA

Key words : 音楽療法, 発達障害児, 地域活動

1. はじめに

平成14年5月より, 社会福祉法人三矢会「太田川学園」において, 知的障害児を対象とした土曜教室事業が開始された。この事業は, 学校完全週5日制の実施により, 養護学校や特殊学級に通学している障害児の土曜日の過ごし方に問題が生じること, またそれによって障害児を持つ家庭の負担が増大するなどの問題を解決するため, 太田川学園の地域支援センターが中心になって企画された。したがってその目的は障害児が土曜日を有意義に過ごすことであり, 様々な体育的・文化的活動が組み入れられた。

当初企画された活動はスポーツ, レクリエーション, 音楽, 和太鼓, さをり織り, 陶芸, 和紙漉き, パソコン, 園芸などであったが, 担当する職員やボランティアの確保が難しく, 現在行われている活動はスポーツ, レクリエーション, 音楽, さをり織り, パソコン, ボランティア企画によるオリジナル活動の6つである。

筆者は, 平成13年より太田川学園において中・軽度の知的障害を持つ成人の音楽療法を行っていた関係で, 新事業への協力を求められた。学園からは音楽療法をとの依頼であったが, そもそも本事業の目的は障害児の余暇の過ごし方を充実させることと保護者の負担を軽減することであり, 保護者たちも先ず子供たちが音楽の時間を楽しく過ごすことを望んでいた。そのため

子供たちが喜んで参加できる場の提供ということを中心に考え, とりあえずは音や音楽で遊ぶということを中心にして, 特に音楽療法としての目標設定は行わなかった。故に本事業のチラシやパンフレットには「音楽療法」ではなく, 「音楽」とのみ掲載してある。とは言うものの, 障害児の音楽活動は健常児と同じようにはできないので, 必然的に療法的なテクニックが要求された。また10月からは本学音楽療法士養成課程における音楽療法実習の一部として学生たちが参加するようになったため, 15年度からは保護者に音楽療法の実習として活動を行っていることを通知し, 承認を得て実施している。

2. 土曜教室の日課

土曜教室における活動および利用者, 職員, 講師(筆者およびパソコン講師), ボランティアの動きは表1の通りである。

3. 活動内容

当初の予定では土曜教室の定員は30名であった。しかし募集開始とともに申し込みが殺到し, 最終的に園長の決断で予定の2倍にあたる60名を受け入れることになった。しかし予想以上に重度の子供が多く, 職員・ボランティアの負担が非常に大きかった。その反省から15年度は募集定員を45名とし, 活動の充実を

(表1)

時間	活動名	利用者	職員	講師・ボランティア
8:00			朝会	
8:10	迎えバス発		出欠状況確認 バス運転, 添乗 活動準備	
9:50	迎えバス着		ボランティアとの打 ち合わせ	ボランティア集合 活動内容の打ち合わせ確認
10:00	朝会	出欠の確認 健康観察 活動メンバー編成	連絡帳確認 朝の会進行	朝の会
10:15	午前活動	レクリエーション スポーツ	レクリエーション&スポーツ指導, 援助	
11:30	午前活動終了			
11:50	食堂移動	食堂移動	配膳	
12:00	昼食	食事	食事介助	
12:30	歯磨き	歯磨き 休憩	歯磨き介助	
13:15	午後活動	グループ別活動	グループ別活動指導, 援助 音楽①, 音楽②, パソコン, さをり織り オリジナル活動	
14:30	午後活動終了			
14:40	おやつ	おやつ 荷物準備	おやつ準備 荷物確認 連絡帳記入	おやつ準備 荷物確認
	終わりの会	終わりの会	終わりの会進行	終わりの会
14:50	バス乗車	バス乗車	バス乗車介助	バス乗車介助
15:00	送りバス発		バス運転, 添乗 片付け, 清掃, 反省会	片付け, 掃除 反省会 解散
16:00				
16:40	送りバス着		反省会	
16:45			次週打ち合わせ	

図った。毎回参加人数は異なるが、14年度は平均45名程度、15年度は30名程度であり、職員・ボランティアも慣れてきたこともあって、今ではどの活動も比較的スムーズに行われている。しかし常時介助や見守りを必要とする子供が多く、ボランティアの数が少ない日のやり繰りには苦勞している。

14年度から様々な試みがおこなわれてきたが、現在まで続いている活動はレクリエーション、スポーツ、音楽、パソコン、さをり織り、オリジナル活動の6つである。表1に示したように、レクリエーションとスポーツは午前中に行われ、他の4つは午後の活動となっている。音楽は希望者が多いこともあって3グ

ループで行われており、14年度は3名の講師、15年度は2名の講師が担当した。現在は3グループのうち2グループを筆者が、もう一つを太田川学園の職員が担当している。筆者が担当する2グループはそれぞれ6名ずつで、隔週交代で行われている。現在の音楽グループの活動概要は以下の通りである。

音楽① (文化短大担当)

参加者：12名 (6名×2グループ)

場 所：地域交流センターホール

目 的：音楽を聴いたり演奏したりすることで、仲間とのコミュニケーションを持ち、楽器の

音やリズムからの刺激を受けるとともにリラクゼーションを図る。

内 容：歌唱，楽器演奏，鑑賞，ムーブメントなど

音楽②（太田川学園職員が担当）

参加者：7～8名程度

場 所：青年学級プレイルーム

目 的：音楽の鑑賞や，音楽に合わせて体を動かすことで，音楽を楽しみ仲間とのコミュニケーションを図る。

内 容：リトミック，手遊び，ダンス，ミュージックビデオ鑑賞など

4. 音楽活動の実際

事業が開始されてから約2年，活動の形態も内容もかなり変遷を遂げた。そこで14年5月から9月（第1期），14年10月から15年3月（第2期），15年4月から16年2月（第3期）に分けて，経過を報告する。

第1期は活動全体として子供たちが新しい環境に慣れることに重点が置かれ，音楽活動においては対象児が安心して参加できる楽しい場を提供すること，および各人の能力や性格，音楽の好みなどを探ることが目標となった。そのため計画もゆるやかなもので，子供たちは好きな楽器に触れて音を楽しむ，あるいは筆者と自由な音のやりとりを行うといった活動が多かった。集団としてではなく，個人に焦点が置かれていたために，活動にまとまりがなく，混乱する場面も何度かあった。特にボランティア学生たちが何をしたらよいのかわからず，援助どころか足手まといになることも多かったように思う。

第2期には活動の形が安定し，子供たちも慣れてきて，参加度・集中度も高まってきた。しかし内容的には相変わらず手探り状態が続いており，思うような効果が見られなかった。今振り返ると，我々があまりに「音楽」に固執しすぎたのではないかと考えている。

その反省から，第3期には「遊び」の要素を多く取り入れ，プログラムも多彩になった。まだ歩き回ったり逃げ出したりするケースが時々あるが，自発的に参加する場面が大幅に増えてきた。次に各期ごとに詳細を記す。

(1) 第1期（14年5月～9月）

第1回目は音楽活動を希望する子供全員を集めて，歌唱・楽器活動・リトミックなどを試しに行い，各人

の音楽に対する反応を探った。何名かはとても良い反応を示し，こちら側からの指示も大体理解できるようであったが，大部分の子供たちにとって集団での活動は非常に難しいと感じた。ほとんどが1対1での対応を要する重度の子供たちであった。しかし土曜教室の参加者数や活動の場などを考えると，個人セッションは不可能であり，できる限り1対1で対応できるようにボランティアを確保するというで納得せざるをえなかった。音楽担当講師は3名おり，ボランティア参加の中学校音楽教員が高校生グループを，筆者が小学校高学年～中学生グループ，太田川学園の音楽療法担当職員が小学校低学年グループを担当することとなった。筆者が担当するグループの人数は10名であった。

活動の場は高校生グループが地域交流センターホール，筆者のグループは青年学級のプレイルーム，もう一つのグループは同じく青年学級の食堂に楽器を持ち込んで活動することになった。プレイルームには中央に畳が敷かれており，子供たちは寝転んだりボランティア・スタッフの膝に抱かれて座ったり様々であったが，うろうろと歩き回ったり，部屋を飛び出そうとしたりしてなかなか活動に集中できなかった。多動の子供が多かったので，リトミックなどの動きを伴う活動を組み入れたかったが，カーペット代わりに中央に置かれた畳が動いてしまい，危険であった。それで仕方なく歌唱と楽器活動が中心となったが，言語に問題がある子供たちが多く，歌にはあまり興味を示さなかった。しかし個人的に働きかけると何らかの反応があり，「こんにちは〇〇ちゃん」と歌で呼びかけながら太鼓を差し出すと，嬉しそうな表情で太鼓を叩くという場面があった。しかし人数が多すぎるために，一人の子供が活動している間に他の子供たちは部屋を飛び出そうとしたり，部屋に置かれているいろいろなものでいたずらしたりして，付き添っているボランティアの人たちは一時も気を抜くことができなかったようだ。ただボランティア・スタッフにも問題があり，ほとんどが近隣の大学・短大の学生たちで，子供の扱いに慣れておらず，必要な援助がほとんどできなかった。もし対象児を良く知っている母親や家族の誰かがついていてくれたら，もっと集中してできたのではないかとと思う。

人数だけでなく，子供たちのタイプが様々であったことにも手を焼いた。一般に多動傾向のある子供の場合は，始めに動きのある活動から入った方が活動に集中しやすいと言われている。反対に何に対しても反応

の少ない子供の場合は静かな活動からの方が安心して参加できるようだ。しかし今回のグループ分けは年齢別であり、タイプ別ではなかったため、どちらに照準を合わせるべきか迷った。加えて思いっきり動き回ることができないという部屋の問題もあり、多動傾向の子供たちに対する対応が十分にできなかったように思う。

楽器の問題もあった。プレイルームには古い電子オルガンがあったが、残念なことに筆者は電子オルガンを十分に使いこなすことができない。それで小さなキーボードを持ち込んでのセッションとなったが、子供たちのエネルギーを受け止めるにはあまりにも貧弱な楽器であった。現在はプレイルームではなく、別の場所で活動しているが、楽器の音量や音質には今でも悩まされている。一番の問題は電子ピアノを使用せざるをえないことである。電子楽器は演奏しづらいだけでなく、その機械的な音はクライアントの微妙な変化に対応しにくい。

また部屋の大きさや構造も問題となった。プレイルームの広さは適度なのだが、音が響きすぎてドラムなど大きな音の楽器を使いにくい。逆に地域センターホールは広すぎて音が響かない。音楽療法においては、対象者が音をどのように受け止めているのかは非常に重要で、セラピストは一つ一つの音や音楽について細かな配慮を行う必要がある。そのためにはセラピスト自身が常に自らの感性を研ぎ澄まし、また求められる音を作り出すために技術の習得に励まなければならない。しかし、いかに優れたセラピストであっても、環境の問題は如何ともしがたいのが現状である。筆者は以前にいくつかの施設で音楽療法の実践を見学したが、音質や音量にまで配慮された実践が行われているケースは非常に少なかったように思う。

音量・音質だけでなく、子供たちが音に関心を向けるよう仕向けるための環境整備も重要である。子供たちの気を引きそうなものはできるだけ排除し、今必要な刺激だけを精選して与えていくことが大事である。なぜなら発達に遅れのある子供は、外界からの刺激を自分の中でうまく処理することができず、大事な情報に気づかなかったり、あるいは逆に不要な情報を過剰に受け取ったりすることが往々にして起きると考えられるからである。その結果、情緒不安に陥ったり、拒否的になったりして、問題行動に繋がっていくこともある。したがって子供が混乱しないように刺激を精選し、与えられた音に集中できるような環境に整える必

要がある。

太田川学園の場合、活動場所が大きな問題であった。地域交流センターのホールは広すぎ、また多目的ホールであるために多種多様な物品が置かれ、子供たちはなかなか音楽に集中することができない。一方、青年学級のプレイルームは適度な広さであるがピアノがない。楽器庫も遠いので、大型楽器を持ち込むことが困難で、どうしても小物楽器が中心になってしまう。また庭側が大きなガラス戸になっており、子供の注意が外へ向いてしまいやすいという問題点もあった。

第1期の活動を総括すると、この時期はまず対象児を理解することに重点がおかれ、活動は試行錯誤の連続であった。故に連続性や発展性に欠け、単発的な活動が多かった。子供たちの多くが勝手に動き回り、あるいは音楽にほとんど関心を示さないということもあった。全員が揃って活動に集中する場面は少なかったように思う。しかしその中でも子供たちが意欲的に取り組みそうな活動、あるいは続けることで子供たちの発達に繋がりそうな活動のいくつかは見えてきた。それと共に活動をより療法的に発展させていくためには、人的資源を含め、幾つかの環境改善の必要性を強く感じた。

(2) 第2期(14年10月～15年3月)

第2期は、第1期の反省から、まず会場を青年学級プレイルームから地域支援センターホールに移すよう申し出た。そのため、すでに地域支援センターホールで行われていた高校生グループと筆者のグループを交互に行うようスケジュールを調整した。地域センターホールも音楽療法の場としては決して十分な環境ではないが、少なくともピアノがあること、大型楽器の保管庫が近いこと、リトミックやサーキットなど動き回る活動が可能なことなど、プレイルームよりは便利であった。反面、子供たちの気を引きそうなトランポリン、エアロバイク、テレビ、オーディオ機器などがたくさん置いてあり、集中を乱す可能性があった。そこで動かせるものは部屋の外に出したり、目立たないよう部屋の角に置いたり立てかけたりして、できるだけ子供たちの目に入らないよう設定した。

もう一つの援助者の問題も、本学で音楽療法を学ぶ学生たちが実習として参加するようになったことで、かなり改善された。しかし最初はやはり不安げで、どのように子供たちに接しているのか戸惑っている学生が多かった。そこで午後の音楽の時間だけでなく、朝

のスポーツやレクリエーションの時間から参加して、子供たちと一日中一緒に過ごすように実習形態を改めた。体力的にかなりきついという声もあったが、子供たちの様子がよくわかって音楽活動もしやすくなったという意見が大部分で、この形は今後も続けていこうと思っている。

この時期は学生からの意見も取り入れたが、主として筆者の計画で活動が行われた。ピアノを学生が交代で担当し、子供たちが好む音楽に合わせて楽器を鳴らしたり、体を動かしたり、学生たちが演奏する生演奏を鑑賞したりした。トランポリンや鍵盤マットなども使用したが、どちらも喜んで参加していた。しかし音楽を用いることに固執して失敗に終わったケースもある。音楽療法だから必ず音楽が必要といった思い込みがあった。特に障害の重い子供に対しては、彼等のレベルに合わせたもっと自由な「遊び」的な活動が必要だったように思う。

この時期、子供たちの表情はかなり良くなり、部屋を飛び出すこともほとんどなくなった。プログラム内容によっては相変わらず参加できない子供もいたが、時々自分から近寄ってきて楽器を鳴らしたり、アシスタントの学生に促されて一緒に動いたりしており、全く参加しないと言うことはなかった。しかし全体として見るとまとまりがなく、こちらが意図したような結果に終わることは少なかった。この原因の一つには学生がピアノを担当したということがあるかもしれない。彼等は楽譜を見て、指示された通りに演奏することはできるが、子供たちのペースに合わせて自在に音楽を操るということに慣れていない。子供を見ながら演奏するということが全くなかったように思う。ほとんどの学生が楽譜にしがみついて譜面通りに演奏することがやっとなという状態であった。前述したが、療法の場での音楽の質というものは非常に重要である。これは「上手」「下手」ではなく、あくまでも対象者に合った音楽であるかどうかの問題となる。かなり上手にピアノを弾くことができる学生でも、自分の思いばかりが優先して、全く子供のペースに合っていないということがしばしばあった。演奏芸術においては演奏者の思いをいかに聴衆に伝えるかということが重要だが、音楽療法で最優先されるのは対象者がその音や音楽をどう受け止めるかということである。その点は肝に銘じておかねばならない。特にピアノコースの学生の場合には自分の思い込みで演奏する傾向があり、テンポが速すぎたり遅すぎたり、あるいは子供らしい躍動感に欠

ける演奏が多かったような気がする。ピアノコース以外の学生ではまず基本的な演奏技術が問題となるが多かった。ミスタッチ、音量不足、リズムの乱れなど、音楽として未完成な演奏が多かった。学生たちも一生懸命頑張っていたのだが、音楽経験の未熟さに加えて音楽療法の授業時間があまりにも少なく、十分に演習を行う時間がなかったのが、何が問題視されているのかさえ理解できていないというケースもあったように思う。

(3) 第3期(平成15年4月～平成16年2月)

2年目は2名の音楽担当講師がやめ、筆者と保育士資格を持つ学園職員が受け持つことになった。また土曜教室を担当する学園側の職員も総入れ替えになって、活動全体を見直す必要にせまられた。せっかくこれまで作り上げてきたものが全部御破算になって、またゼロからスタートするはめになったが、これまで引きずってきた問題を解決する良い機会でもあった。まず学園側に要求したのは受け入れ人数の制限である。できれば年齢、障害のタイプやレベルに応じて細かくクラス分けしたかったのだが、時間や場所の制限もあり、結果的に年齢別に6名のグループを2つ作り、隔週でセッションを行うことになった。しかし音楽に参加させたいという保護者の希望が多かったので、保育士資格を持った学園職員が音楽療法とは別に1グループを受け持つことになり、我々のセッションに参加できない子供たちの受け皿となった。このようにして新しく編成されたグループであったが、約半数は前年度から引き続き参加の子供たちであり、最初から比較的スムーズに開始することができた。

実習学生への指導についても幾つかの点を改めた。先ずできるだけ学生たちの意見を尊重し、計画段階から学生に任せることにした。前年度の反省から、筆者の計画が学生たちの知識や技術のレベルに合っていないことが多々あったためである。またピアノにこだわらないという姿勢を打ち出したことも良かった。それぞれの学生が自分の得意分野を生かして、様々な工夫をするよう提案した。一つの例だが、ある打楽器専攻の学生はリトミックにスネアドラムを使用し、大きな成果を得た。前年度にピアノで試みて散々な失敗に終わった「go - stop」の活動をドラムだけで試みたところ、子供たちは驚くほど生き生きと反応した。太鼓の音は人間の原初的な感覚を呼び起こすという話を聞いたことがあるが、確かにピアノよりドラムの音の方

が子供たちの感覚に直接的に伝わったようである。しかし、もしかすると部屋と音響の関係もあったのかもしれない。前述したように音が響きにくい広い部屋で、ピアノの音が常に物足りなく感じられるという環境であったので、ピアノの音で子供たちを動かすのは困難であったように思う。一方、部屋中に響き渡るドラムの音はダイナミックで、普段は活動的でない子供たちをも動かしてしまう力があつた。

またこの活動では予想外の効果も得ることが出来た。何回か続けていくうちに、子供たちがドラムに興味を持ち始めたのである。そこで今度は子供が交代でドラムを叩くようにした。最初はただ面白がって叩いていただけだったが、次第に「ドラムが鳴っている間だけ動く」という決まりを理解し、自分で「叩く、止める」をコントロールするようになった。我々にとっては何でもないことだが、他人との関わりの難しい子供が、他人の動きに目を向けつつ何かをすることとはとても大変なことである。この時期、子供とセラピスト側とのコミュニケーションはある程度成立しており、1対1でのやり取りは可能になっていたが、グループとしてのまとまりはなく、子供同士がお互いに関わり合うということは皆無であった。その意味でも子供同士がお互いを意識する契機にもなったのではないかと思う。

ピアノ以外の楽器を用いることの他に、場合によってはCDを利用することも認めたが、これには若干の問題が生じた。安易にCDに頼るケースが多発し、あるセッションでは、お決まりの始めと終わりの歌以外

はすべてCDで間に合わせてしまうということがあつた。意味のあるCDの使い方もあるとは思いますが、ただ単にピアノが苦手だからという理由で用いるのは感心しない。全ての活動においてクライアントがCDに合わせなければならないという点に問題があるように思う。或る意味でカラオケと同じである。それでCDを使用する際には「ここでCDを使う理由は何か」ということをはっきりさせて使うよう指示した。

活動内容は小学生グループと中・高校生グループでかなり異なり、小学生グループでは歌い聴かせや手遊びなどを通してスキンシップを図ること、およびパネルシアター、指人形、フラップバルーン、シャボン玉などの視覚刺激を多く取り入れるようにした。一方、中・高校生グループは前年同様で楽器活動が中心であったが、個人的に対応する部分と全体で協力して合奏する部分、思いっきり音を出して発散させる部分と静かに休む部分、自由に音を出させる部分と指示通りに音を出す部分、というように全体にめりはりをつけた計画を立てるよう心がけた。表2、3はそれぞれのグループの活動例である。

結果として、第3期の活動はかなり充実したものとなった。しかし問題が全くなかった訳ではない。一番の問題はメンバーが完全に固定できなかったことである。毎回のように欠席者があり、その度にメンバー以外の子供が何人か参加してきた。学園側からは部屋に置いてもらって音楽を聴かせるだけでいいと言われたが、そこにいる以上は何らかの形で参加させないわけにはいかず、結局なれない子供の対応に追われてしま

(表2) 小学生グループの活動例

プログラム	曲 目	内 容
1. 始まりの歌	♪ 手をつないでこんにちは	一人ずつ名前を呼んで挨拶する
2. 歌唱, 手遊び	♪ パンダ, うさぎ, コアラ	歌いながら手遊び(模倣)
3. ハンドドラム	♪ 太鼓を叩きましょう	一人ずつ自由に太鼓を叩く。
4. 布とフルーツマラカス	♪ 飛んでったバナナ	歌いながら大きな布を皆で持って上下に動かす。中にフルーツマラカスを投げ入れる。
5. シャボン玉	♪ シャボン玉→即興演奏	ピアノ演奏に合わせてシャボン玉を飛ばす。
6. 合奏	♪ ラップアビギ	音楽に合わせて、リードホーンを一人ずつまたは全員一緒に吹く。
7. パネルシアター	♪ 雪のペンキ屋さん	パネルを見る。→C1が自分で音楽に合わせて人形を動かす。
8. 鑑賞	♪ 子犬のマーチ	学生が演奏するハンドベルの演奏を聴く。
9. 終わりの歌	♪ さよなら〇〇ちゃん	一人ずつ名前を呼んで挨拶する。

(表3) 中・高校生グループの活動例

プログラム	曲 目	内 容
1. 始まりの歌	♪ 手をつないでこんにちは	一人ずつ名前を呼びながら挨拶
2. ハンドドラム	♪ Beat the drum	音楽に合わせて自由にハンドドラムをたたく。
	♪ よく聴いてたたこう	セラピストがたたくりズムを模倣してたたく。
3. 合奏	♪ ラップバギ	音楽に合わせて自由にラップを吹く。 ①全員一緒に②一人ずつ順番に
	♪ カリヨン	ハンドベルとリードホーンをセラピストの指示にしたがって演奏する。
4. リトミック	♪ スネアドラム即興	ドラムのリズムに合わせて歩く、走る、止まる。
5. 鑑賞	♪ オブラディオブラダ	床に寝転んで CD を聴く。
6. 終わりの歌	♪ さよなら〇〇君	一人ずつ名前を呼びながら挨拶

うことが多かった。さらにはメンバー構成が年齢別であったために、個別のニーズに答えることが難しかったことがあげられる。たとえば高校生のY君は打楽器を中心にした発散的な活動についていけず、いつも下を向いたままで拒否の姿勢が目立った。しかし小学生グループに余裕があった際に誘ってみたら、シャボン玉やフリップバルーン、パネルシアターなどに積極的に参加した。バルーン活動では大きな声をあげて笑いさえた。2年間彼を見てきたが、声を聞いたのはこの日が始めてだった。逆に小学生のM君は積極的で何にでも興味があり、中・高校生グループの中でのの方が生き生きと活動できた。時間と場所が確保できればもっと各人の能力や性格に合ったグループ編成が可能なのだが、土曜教室の性格を考えると非常に難しい。

活動内容については学生に任せたこともあって、対象児のレベルに合っておらず、難しすぎると感じるものが何度かあった。特に小学生グループにおいてその傾向が強かったように思う。逆に中・高校生グループでは思ってもいない反応が出るものが多く、かなりの手ごたえがあった。リトミックでも「歩く、走る、止まる」だけでなく、「ドラムがいくつなったかよく聴いて、その数だけ歩く」などというかなり注意力や認知力を伴う内容に発展させることができたし、合奏の時もきちんと自分の順番を待って演奏することができた。中には学生たちが圧倒されるほど素晴らしいリズム感を持った子供もおり、学生たちと本格的なアンサンブルをすることも可能だった。活動の様子は毎回ビデオ撮影し、全員で振り返りをしていたので、ひょっ

としたら中・高校生グループの活動を見て、小学生グループの担当者はあせったのかもしれない。何度か子供たちのレベルに合っていないという指摘をしたにも関わらず、最後まで難しい課題を準備したグループがあった。筆者の考えでは、発達レベルが低いほど自由な枠のない活動が適しているように思える。したがって音楽に合わせて何かをするといった活動ではなく、セラピストの方が子供の発する音に合わせていくというやり方がふさわしいと思うのだが、残念なことに即興と言ったとたんに学生は萎縮してしまうので、思うような活動が展開できなかった。このグループによる差は学生たちの実習記録にも如実に現れており、中・高校生グループの担当者はある程度の達成感を持っているのに対し、小学生グループを担当した学生たちの記述には迷いや自信のなさが目立った。

子供たちにとっては隔週の活動であったが、学生にとっては月1回の活動で、しかも他の学生が行ったセッションを引き継いで行わなければならないという難しさもあった。毎回のセッションの様子はビデオで確認していたとはいえ、実際にやってみたらビデオから得ていた印象と大違いということも多かったようだ。継続性のなさは評価の難しさという結果を生んだ。「毎日が完結型のセッションであったために、療法的観点から理論的裏付けをすることが難しかった」という感想を書いた学生もいた。継続性ということについては筆者自身も重視していたので、授業の度に、前回のセッションの流れを保つようにと言い続けてきた。逆に何の発展性もないまま、ただ前と同じ活動を繰り返すと

いう例もあった。そのような場合には、同じ曲でもやり方を変えてプログラムの質的転換を図ることを提案した。次から次へと新しい課題を与えるのではなく、同じステージで豊富なヴァリエーションを行うことで横への広がりを持たせ、少しずつ上のステージへ向かうことが重要ではないかと思ったからである。

このような小さな変化を積み重ねながら繰り返し同じ活動を続けた結果、1年後には、全く自分のペースでランダムに演奏していた対象児がピアノの音に注意を払うようになり、ピアノに合わせてリズム打ちができるようになった。またセラピストと音やリズムで色々なやりとりをする子供も現れた。ここで注目したいのは演奏が上手になったということではなく、子供が外の世界に対して関心を示すようになったということである。この場合の外の世界とはピアノの音であり、セラピストの声や音、仕草などである。その結果、クリスマス頃には簡単な合奏もできるようになったが、これは子供たちがセラピストの合図を的確に受け止めることができるようになったからこそ可能になったのである。健常児にとっては何でもないことだが、視線を合わせることさえ難しかった子供にとっては大きな進歩であると言わざるを得ない。

しかし2、3の活動を除いては、学生側の能力の差もあり、同じ活動を継続することが難しかった。演奏能力の高い学生がいる場合は色々な可能性が生まれたが、そうでない場合はCDに頼ってしまうこともあった。これも学生の実習記録の記述だが、「太田川学園での実習は、音楽の質ということを考えさせられた。不快な音やつまらない音に対して、座っていた子が動き出したり、部屋から出て行ったり、泣き出したりと素直に拒否の態度が出てきていたので。「音楽療法士は音楽のスペシャリストであれ」という意味がよくわかった。」

しかし全体的としては、子供たちが生き生きと活動する場面が多かったし、回を追うごとに表情も豊かになり、学生たちとのコミュニケーションも深まったと思う。確かに「つまらない」と感じた時の対応にはてこずったが、音楽の良し悪し以上にセラピストやアシスタントがどのように子供と向き合うかによって、子供たちの反応は大きく異なった。音楽の技術を磨くことは音楽療法士として当然の義務だが、対人援助の技術もそれ以上に大切である。この点では、高齢者とのセッションの時よりも、学生たちは自然体でのびのびと子供に接していたように思う。

5. 結果と考察

子供たちの生活に顕著な変化が見られたかというところは一概にそうとは言えない。特に音楽以外の場での変化はわかりにくかった。しかしセッション開始時からすると、全員がかなり落ち着いて活動に参加できるようになったし、自発性も見られるようになった。

たとえば高校生T君の場合、最初の3ヶ月ほど、カーテンの後ろに隠れてなかなか顔を見せてくれなかった。時々カーテンの後ろから手を出して、楽器を要求することがあったので、そのうち出てくるだろうとは思っていたが、デジタルドラムでの活動をきっかけに積極的に参加するようになり、今では活動の開始時には一番先に来て椅子に座って待っているし、セラピストやアシスタントに自分から近づいてくるようになった。楽器活動やリトミックをとて楽しんで見られる様子が見られ、認知力を問う活動にも積極的であった。しかし発語はほとんどなく、イエスの時にはうなずく、ノーの場合は両手でバツ、数を答えるときには指で示すといった具合だが、最近は頻繁に「だめ」「なに？」と言うようになった。最近ではセラピストの言葉を模倣しようとする様子も見られ、楽器を示しながら「これはカバサ」とゆっくり言って聞かせたら、声には出さなかったが口を「カバサ」というように動かした。

また小学生のS君は最初の1年目、ほとんど椅子に座っていることができず、活動の輪に入ってくることもなかった。あまりにも無関心なので、2年目はメンバーからはずしてもらおうとさえ思っていた。しかし2年目の最初のセッションでツリーチャイムに興味を示し、その後は太鼓やラッパにも積極的に取り組むようになった。今ではグループの中で最も安定している。落ち着いて自分の番を待っているし、アシスタントの学生とのコミュニケーションも豊かになった。時々、薬の影響でぼんやりしていることもあるが、笑顔が頻繁に見られるようになったのは嬉しい。

音楽だけでなく、視覚刺激を取り入れることで成功した例もある。多動でじっとしていることができないNちゃんは、パネルシアターを通して活動に集中するようになった。まだ60分間じっと座っていることはできないが、回を追うごとに持続性が高まっている。

挨拶の時など、なかなか視線を合わせようとしないのだが、パネルシアターや指人形の動きはしっかりと追っている。またシャボン玉や布などを使った活動では、言葉にはならないが、「わあー」などの発声がある。

しかし逆に比較的障害の軽いM君は、自分のペースに合わないパネルや布の活動で苛立つことが多かった。言葉がしゃべれるM君は歌が大好きで、次から次へ歌をリクエストするのだが、小学生グループでは音楽だけでなく、視覚・触覚なども用いた多感覚的な活動に重点が置かれていた。Mは楽器活動には積極的に参加するのだが、その他の活動に対しては拒否的で、何度かパニック状態になった。最初の頃は彼の要求に従い、プログラムを変更してリクエストの歌に答えたりしていたが、次第に我儘がエスカレートしていくように感じられたので、最近は穏やかな拒否も行っている。

他の子供たちにも多かれ少なかれ変化が現れているが、それが音楽の時間以外の行動にどう結びついていくのかということまでは追跡調査ができていない。このあたりが今後の課題になっていくのだろうか。

全体的にはやはり2年目の子供たちの変化が大きいように思われる。それだけ彼等の発達は緩やかで、じっくり腰を据えてかからないと変化が現れにくいと言うことかもしれない。しかし確実に成長しているのだ。小さな変化なので、見逃されてしまうことも多いのではないかと思われるが、学生たちはしっかりと彼等の変化を捉えていたようである。ある学生は次のように書いている。「最初は追いかけごっこで終わっていましたが、次第にまとまってきて、少しずつ指示が通るようになりました。また子供たちは頻繁に声を発するようになり、表情や仕草も豊かになってきました。実習をする前は、障害を持った子供に対して何の感情もわかなかったけど、今ではちょっとした反応でも示してくれると、とても嬉しくなります。」

ただしこのような変化がすべて音楽活動によってもたらされたものと考えすることはできない。子供たちが落ち着いてきたのは、第一に環境やスタッフに慣れてきたためであり、この場が自分にとって安心して過ごせる場だとわかってきたことが反応を引き出す要因になったとも考えられるからだ。前述したT君にしても、家ではもっと言葉を発しているのかもしれない。したがって今後の課題として、セッション時以外の様子をチェックする必要があるだろう。そのためには今まで以上に学園の職員との連携が必要となるだろうし、これまでほとんど行われてこなかった家庭との連絡も何とかしなくてはならない。幸い、この春本学を卒業したYさんが、学園に就職することになり、土曜教室を担当することになったので、お互いに連絡を密にして、家庭を巻き込んでの活動に発展させていきたいと望ん

でいる。

6. 終わりに——問題点と今後の課題

太田川学園の地域支援活動として始まった障害児の土曜教室の音楽講師を依頼されて丸2年が経過した。途中から本学の音楽療法を学ぶ学生たちが実習として参加するようになり、かなり充実した活動として展開されるようになってきたとは思っているのだが、まだまだ問題が山積している。

第一の問題は学園側の意図と音楽療法実習としての性格の相違である。最近、音楽療法に対する社会の関心はかなり高まってきているとは思っているが、まだまだ一般的には、障害者に音楽を提供すればそれが音楽療法という安易な認識である。したがって対象者一人一人を丁寧に見ていこうとする我々と、できるだけ不特定多数の子供たちをみてほしいという学園側の思いがしばしば食い違っており、行ってみたらこちら側が考えていたメンバーではない子供たちが何人もおり、せっかくの計画が無駄になるということもあった。メンバーのうち毎回参加は約2/3で、残りのメンバーは常に入れ替わるという結果になってしまった。したがって継続的に活動を展開することができず、学生たちもやりにくかったと思う。来年度はまずメンバー編成をもっと慎重に考える必要がある。

対象児の情報が少ないことも計画を立てる段階で苦労した。土曜教室への参加に際しては、学園側が保護者に対して簡単な聞き取り調査を行っており、必要に応じて(問題のない範囲で)情報提供はしてもらえるのだが、とても十分なものとは言えなかった。しかし学園側としては利用者に対する守秘義務があり、外部者に対し、気安く情報を漏らすことはできない。施設で音楽療法を行う場合、多くの音楽療法士が対象者の情報が少ないということの問題点として挙げているが、この問題は簡単には解決しないだろう。とりあえず来年度は、参加者の保護者に、音楽グループ独自のアンケート調査を行ってみようかと考えている。

第三の問題は短大側の問題である。学生たちは交代で実習するので、月1回しか土曜教室に参加しない。年間通してもわずか7回の担当である。1ヶ月前の活動を振り返りつつ、活動内容の継続を図ることはとても難しかった。毎回の記録も単発的な記述に終わっており、1年間を振り返っての評価はさらに難しかった。実習時間が少ないことは学生自身が一番身に染みていたようだ。昨年度も今年度も、担当ではないのに自発

的に参加する学生が数名おり、真摯に取り組むその姿には心打たれた。

また実習に出る前に、学内で内容をチェックする時間がないことも大問題だった。「音楽療法実習」という時間はあるのだが、この時間はすべて高齢者の実習準備および振り返りに使われ、障害児のセッションについては総合音楽コースの「総合音楽研究」の時間を使わざるをえなかった。しかし「総合音楽研究」1コマでは実習の振り返りをするのが精一杯で、プログラムの内容まで検討する余裕がなかった。そのため、前述したように子供のレベルに合わない内容の活動になってしまったこともあったし、安易にCDばかりを利用してしまおうということもあった。時間外の指導も多かったし、学生たちも遅くまで居残りして実習準備に追われた。特に高齢者のセッションを木曜日に行い、直後の土曜日に担当が回ってきた場合は大変だったろうと思う。しかしこの問題については、16年度から実習形態を改め、学生を2グループに分けて、 Semester毎に高齢者と障害児を担当するようにしたので少しは緩和されるかと思う。

学園側との意思疎通の問題もあった。この数年、太田川学園は急速に事業拡大を行っており、この1年間だけでも大幅な人事異動が2回行われた。初年度の担当職員たちは活動をどのように展開していくか色々と考えねばならず、筆者も何度か意見を求められ、意見交換が活発に行われた。試行錯誤を繰り返しながら2年目に入り、ようやく活動の流れができて、これからさらに充実させて行こうという段階で、職員が一人を残して総入れ替えになった。特に一番の相談相手だった音楽療法担当の職員（本学卒業生）が別の施設に配置換えになったことが痛手だった。2期目の職員も協力的ではあったが、残念ながら全く音楽療法の知識がなく、どちらかというと「おまかせします」という感じだった。ボランティアの数が減って、手が回らないという事情もあるのだが、この状態は依然として続いている。

以上の事柄を踏まえ、来年度の課題として次のようなことを考えている。まず子供たちに関することでは

- ①セッションに参加するメンバーを固定する。
- ②各対象者についての情報収集を適宜行う。問題のない範囲で、保護者にアンケート調査を行う。また実習学生の指導については
 - ①2グループに分け、前・後期で高齢者担当と障害

児担当を入れ替える。これによって集中的、効率的にそれぞれの音楽について学ぶことができる。

- ②全員が同じ役割を担うのではなく、各自の能力に応じて役割分担をさせる。(ピアノが苦手な学生に伴奏を強要しない。)
- ③ピアノ以外の楽器で行うことができる活動をもっと取り入れる。
- ④記録の取り方についての指導を徹底し、学期末には一人の対象者についての事例報告が書けるようにする。

などを目標として、16年度の実習を行いたいと考えている。

参 考 文 献

- 1) 遠山文吉：障害児にとって音（音楽）とは何か音楽療法の原点を考える，障害児の成長と音楽，48-64（1984），音楽の友社，
- 2) 宇佐川浩：音楽療法の発達論的検討，障害児の成長と音楽，65-85（1984），音楽の友社
- 3) K. Aigen: Paths of Development in Nordoff-Robbins Music Therapy (障害児の音楽療法，ノードフ＝ロビンズ音楽療法の質的リサーチ，中川 豊 訳，ミネルヴァ書房，2002)
- 4) P. Nordoff & C. Robbins : Music Therapy in Special Education (障害児教育におけるグループ音楽療法，林 庸二 監訳，望月 薫・岡崎香奈 訳，人間と歴史社，1998)
- 5) E. H. Boxhill: Music Therapy for the Developmentally Disabled (発達障害児のための音楽療法，林 庸二・稲田雅美 訳，人間と歴史社，2003)
- 6) J. Alvin: Music Therapy for the Autistic Child (自閉症児のための音楽療法，山松質文・堀 真一郎 訳，音楽の友社，1982)
- 7) 猪之良高明：親子で楽しむ音楽療法，ショパン，2004
- 8) 猪之良高明：はじめようピアノで音楽療法，ショパン，2001
- 9) 二股 泉：音楽療法の設計図，春秋社，1999
- 10) 中島恵子・山下恵子：コ・ミュージックセラピー 春秋社，2002
- 11) 熊谷高幸：自閉症からのメッセージ，講談社現代新書，1993

Summary

The writer has been doing a music therapy for mentally disordered children at the welfare facility "OTAGAWA GAKUEN" every Saturday. This activity has been conducted as music therapy practices for the students of the college. This paper reports these activities between May, 2002 and February, 2004, and reveals various problems of them and tries to improve the therapeutic activities.

It is certainly true that these activities have brought some effects on these children, who were hardly able to participate in group activities, but we haven't been able to assure that how these effects remain in their daily lives. From now on, it would be necessary for us to deepen the partnership with the facility and also their parents observing the effects.

In terms of music therapy practice, there are some problems. One major problem is that students have few experiences in music therapy. So they couldn't make good use of music, however, it's necessary for them to take enough lessons in the class.

Another problem is lying on the circumstances around music therapy. To make the circumstances better, we should popularize the music therapy more, and also should fulfill the needs of therapists in the fields. Now the activities which welfare facilities need doesn't necessarily fit into those of music therapists, but we will improve these activities step by step, with mutual communication.